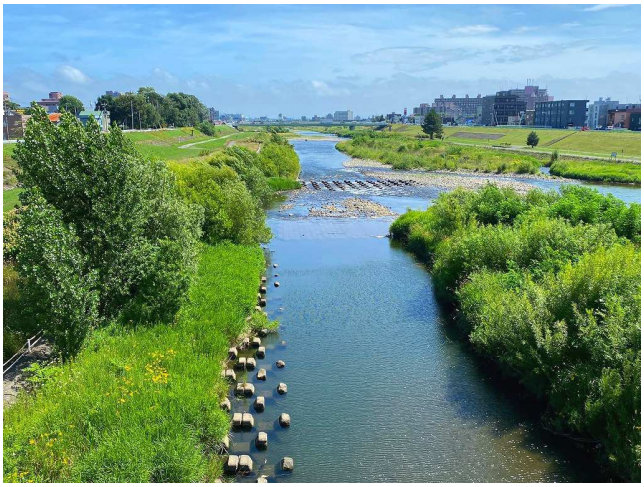
2023.9.15
No.236

編集・発行人　樋口みな子
E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間2,000円）

軍備も原発もいらない、平和に暮らしたい

8月24日に、福島第一原発の汚染水（ALPS処理水）の海洋放出が実施されました。岸田首相は「漁業関係者の合意がなければ放出しない」と言っていたのにも関わらず実施し、中国は日本の水産物の禁輸で応じました。そうなることは十分予想できたことではないでしょうか。直ちに海洋放出を中止してほしいです。小出裕章さんは（元京大原子炉実験所助教）は「マスコミや原子力マフィアたちは『処理水』と詐称しているが、その130万トンの水全部がれっきとした『放射能汚染水』である。その上、トリチウムを考慮から外したところで、130 万トンある汚染水の約 70％には、ストロンチウム 90、ヨウ素 129、ルテニウム 106 などトリチウム以外の放射性核種が未だに国の基準を超えて存在している。まずやるべきは地下水の流入を止めることだった」と述べています。「タンクを作るための土地は福島第一原発の敷地にまだまだあるし、周辺には除染廃物を置くために国が確保した中間貯蔵施設用の土地が広大にある」と述べています。「ヒバクと健康 LETTER 通巻76」2023-8-2から引用。



8.10猛暑の中、病院に向かう途中で出会った豊平川の涼しげな風景に心が和みました。（みな子）

他にも方法はあるようです。政府はなぜ科学者の意見を聞かないのでしょうか。

福島の原発事故を機に発足した泊原発の廃炉をめざす会裁判で、闘っている原告の一人です。2022年5月31日の運転差止判決から1年。控訴審が始まっていますが、裁判から11年。長い時間が過ぎました。

私たちの原告団長でもあった、斉藤武一さんは市民科学者でもあり、泊原発の温排水を雨の日も雪の日も長年測り続けてきた方です。その活動に敬意を持っていましたが、4月に急死されました。天国で政府の決定に怒っていると思います。福島の原発事故からたくさんのことを学んだはずです。再稼働の動きには怒りしかありません。

漁業も農業も安心できる政策への転換を真剣に考えてほしいです。

ロシアがウクライナを侵攻してから1年半になりました。多くの兵士だけでなく、お年寄りや女性や子どもが殺され建築物も破壊されました。原子力発電所が攻撃されて、放射能汚染が心配です。さらにロシアは核兵器使用も辞さないと脅しています。核抑止力は破綻しています。父を亡くした子どもが「兵士になって戦う」と答えていたのに胸が痛みました。日本の来年の防衛費が過去最高の7兆7385億円には憤りしかありません。ミサイルは要りません。医療や福祉、教育など市民が安心して暮らせるように予算を回してください。そして平和な世界の実現のために対話外交に力をいれてほしいですね。

8月9日に原爆被爆への祈りをテーマにした福山桂子さんの作陶展「祈り」を札幌のギャラリーで鑑賞しました。福山さんは広島の原爆で当時14歳だった叔父を亡くしました。叔母も80歳を過ぎてから骨髄異形成症から白血病になって亡くなったと記しています。2ページの福山さんの「かつて人間たりし土」をお読みください。

戦後78年の8月15日は、「平和を求める一日」に参加しました。一人ひとりの思いをそれぞれのかたちで持ち寄る一日でした。カトリックセンターに様々な地域のクリスチャンが集まりました。勝谷太治司教は平和の構築には軍事力によらない対話が必要だとしたうえで、南西諸島で行われている軍事力強化が、住民だけでなく、教会の中でも分断されていると話したのが印象的でした。常に対話が大事で反対意見も尊重しなければならないと強調しました。その後に「沖縄、再び戦場（いくさば）へ」（仮題）スピンオフ作品を観ました。沖縄で進む自衛隊増強の動きや住民の思いを本編完成前に知らせたいと、三上智恵監督が希望のある団体に無料提供しています。

ミサイル基地が建設され、自衛隊が家族と共に

やってきて、戦車が公道を走るようになった島々の今が写しだされます。のどかな暮らしを脅かされている石垣島、与那国島、宮古島の人々、そして過去最大規模といわれる日米共同軍事演習「キーン・ソード23」の実施に体を張って反対をする人々の叫びが響きます。

「今こそ『なんで沖縄が戦場にならなければいけないの？』という問いに正面から向き合って、この流れを止めてほしい。いま必要なのはバケツリレーに参加することではなく、地下を掘ることでもなく、まだ間に合うから、と仲間を誘って『隣の国と仲良くしたい』と叫ぶこと。未来の子どもたちに渡す沖縄がどす黒い戦雲に呑み込まれそうになっていることを知らせ合って、みんなで暗雲を吹き飛ばす行動力ではないだろうか」。「三上智恵の沖縄＜辺野古・高江＞撮影日記」からの抜粋。

沖縄は悲惨な地上戦が繰り広げられました。美しい島々を軍事要塞化し、再び戦場にしようとすることを許してはならないと思います。

私は沖縄戦で4人に一人が犠牲になった沖縄に1990年に家族で行き、集団自決したチビチリガマや、残波岬などを訪ねました。ガマには食器や人骨が散乱したまま残っていました。その惨たらしさに声が出ませんでした。以来、沖縄に関心を持ち続け、三上監督の「標的の村」「戦場ぬ止み（いくさばぬとぅどぅみ）」「標的の島　風（かじ）かたか」「沖縄スパイ戦史」全部観ました。

読者のみなさま、上映会や製作費などへの応援をお願いします。（樋口みな子）

かつて人間たりし土
ー言葉と陶芸作品

福山桂子

2023新作「かつて人間たりし土Ⅲ」撮影：陳省仁さん

陶″広島1945/8/6″作品群の中に、「かつて人間たりし土I、II」の名を付けた2作品がある。作品は見るに不快で、部屋に飾りたくないと思われるだろう。なぜ創作に到ったか？何かをしなければならないと、表題の言葉に脅され続けているように、感じているからだ。

「夏草やかつて人間たりし土」

これは、長谷川櫂の句集「沖縄」（2015年）に収められた俳句だ。長谷川は沖縄本島南部の激戦地で、遺体が葬られる事なく放置され、今日に至って拾われ掬い上げられていることを見聞きして歌っている。赤田康和は「（長谷川が）脳裏に戦争を巡る様々な場面や言葉が出て次々と浮かんでは消え、辿り着いた言葉。夏草が茂る実在の風景から死者達の血や骨が土を覆う過去へ。夥しい死を前に、言葉に尽くせない悲しみや怒り（を表現した）。」と書いている（朝日新聞2018/6/27好書好日欄）。二次大戦末期の沖縄戦では、全島住民の4人にひとりが殺された。普天間米軍基地の移転先とされている辺野古湾の埋め立てに、沖縄本島南部の土を利用（！）する際に、土に人骨が混じっており、その土の使用に大きな反対の声が上がった事は記憶に新しい。辺野古湾埋め立ての土砂の採取地は、激戦地の南部糸満市や八重瀬町だった。

この句は私に、原爆炸裂後の広島の被害を思い起こさせた。それ故に、この句の中7と下5を借りて原爆作品の題とした。焼けた街に残された大きな骨は拾われただろう。小さな指の骨は、どうだったろう。その時焼け爛れた人々は、水を求めて、川に入り、そこで息絶えた。広島市内を流れる7つの川から海に流されたご遺体は、瀬戸内海の波に洗われ、白骨と化して或いは沈み、或いは波打ち際に打ち寄せられた。打ち上げられても、あまりの数に不審と思われる事もなく放置されたのではなかったか。

広島で母を見送った私は、初めて骨拾いをしたが、お骨の全てを拾うように要請される事なく終えている。2回目のお骨拾いは父を送った札幌で、全骨を拾うように促され、驚いた。都道府県で対応は異なる。拾われなかった骨に対する思いに差があるのか。（北では一般に全骨拾遺。）

お骨やその灰の行方を思っている時に、東京骨灰紀行（小沢信男著）に出会った。江戸の、東京の、大火や空襲の地に立つ碑を歩き巡る。明暦の大火、小伝馬町牢跡、小塚原刑場跡を掘れば白骨死体がザクザク出土、関東大震災、第二次大戦時に下町へ投下された焼夷弾による空襲の犠牲者をまとめて供養する両国、築地の地下鉄サリン事件。それらは大火、震災、空襲で亡くなった人達、刑場で処刑された人々、身元不明人が投げ込まれた場所などで、祈りの為の塚ばかりではなく、実際に工事の際に白骨が出てくる場でもあると言う。第二次大戦末期の日本全国で、多くの都市家屋が焼夷弾爆撃により、焼失倒壊した。家屋と共に焼死した人々の骨灰の一部は拾われないまま、残され、土になっていっただろう。

父と母のお骨拾いでは、現代の高温炉焼却であっても、たったひとりの人の白く脆い骨と灰が、25cm余の高さの壺いっぱいに残されることを経験した。ましてや戦時の焼夷弾や火災で焼かれたご遺体や、あまりの多数の死者を火葬場では対応できず、町内会単位での野焼きにも等しい、仮の火葬場で焼かれた広島の御遺体からの骨や灰が、どれほどの量として残され、どれだけ拾われたのか。拾う余裕や死者を悼み、敬意を払って葬る余裕のない中でさらに骨壷の供給もままならない中では多くの骨灰が土砂に混じったまま、その場に埋められたのではないか。

竹西寛子は小説「管絃祭」の中で、原爆投下当日、体調不良のため登校しなかった少女を描いている。爆心近くでの学校での、被爆による直下型の死を免れた少女が、数日後に母校を訪れる。学校は焼け落ち、残された瓦礫の間に指骨の小片が拾われることなく残されて散らばっていた。それらはどうなったのか。

広島の土を掘り返すと、骨が出てくるのか。最近の戦争遺構の発掘現場の土に、骨灰が混じている可能性はあるだろう。が、かつて遺構の地の開

発の際に、土地ならしの工程で見つけられ大切に葬られたと信じたい。ただ土地には、焼けた肉や流された血が染み込み、形を残さないほどの高温で焼け融けた人の成分が混じっているのではないか。広島の土には人の血肉が染み込んでおり、「かつて人間たりし土」を踏んで来たという具合の悪い思いを消すことができない。長谷川櫂も小沢信男も、骨灰の埋もれる地が、日本中に広がるという、歴史的地理的視点を与えてくれた。これまで多くの地で踏みつけて歩いて来たのだろう。自分の想像力の欠如に頭を殴られた。

作品「敬文と淑子」（叔父と叔母の名前）撮影：長澤力さん

私にとっては、まず広島、である。十四歳の叔父が学徒動員中に爆心より1.3km地点で被爆し、2日後に火傷により亡くなった。その67年後に、爆心より2.2km、17歳で被爆した叔母が、放射線被曝後遺症による骨髄異形成症となり、その後白血病となり亡くなった。そのことに対する悲しみと怒りが、広島作品群を作陶するエネルギーである。人が焼却され蒸気となり雲となるイメージ。骨灰の広がる地を傷つきさまよう人々。骨灰の山を登り、また骨灰の山の一部となりゆく人々。地面の下に埋まっている赤ん坊達。掘り出してほしいと土の中から手を伸ばす人々。黒焦げになり、積み重なる体。残骨の重なり。

作陶に向け、課題は多い。

原爆忌　焼けて爛れて　顔も無く
原爆忌　血も固まらず　髪も抜け
原爆忌　死者は名も無く　数となり
原爆忌　七十年後の　白血病
原爆忌　結晶吹き出す　花崗岩
原爆忌　影を残して　人は消え

（小児科医師・陶芸家）

2023年3月30日「逍遙通信」8号から転載

丸山眞男没後25年
民主主義を支える源泉とは

（2021年8月24日、北海道新聞・夕刊に掲載）　**高橋　一**

政治思想史家の丸山眞男が1996年8月15日の「終戦記念日」に82歳で亡くなって、今年で25年となる。

丸山が敗戦後間もない1946年（昭和21年）5月、戦前・戦中の日本を侵蝕した「超国家主義」の思想と心理を分析し、日本社会の支配層に巣食う「無責任の体系」を剔抉して大きな反響を呼んだ論文が「超国家主義の論理と心理」である。雑誌「世界」に発表。当時32歳、新進気鋭の政治学者だった。

丸山の諸論考は、『現代政治の思想と行動』（上・下　未来社、1956年・57年）に収録され（増補版1964年、2006年より新装版）、日本の戦後社会科学の著作としては早い時期の1963年にオックスフォード大学出版局から英訳も刊行された。日本の歴史や政治を学ぶ英語圏学生の必読書である。2018年には中国でも柄谷行人氏の序文を付して中国語訳が刊行された。丸山が逝去した当時、英国の各紙がこぞって追悼特集を掲載したことを思い出す。

大学での講義から早々に撤退する意思を表明していた丸山の講義を、国際基督教大学（ICU）で聴講する最後の機会に恵まれた私は、日本語と英語でなされた講義で、時にブッキッシュな英語にもかかわらず、日本人に混じって多くの外国人学生や研究者が真剣な表情で丸山の言葉に耳を傾けていた光景を忘れることができない。私は後にキリスト教神学を学び、教会や NGO（非政府組織）という実践的な世界に進んだのであるが、丸山の著作から《思想と行動》のダイナミズムを深く教えられたと思っている。

※　※　※

さて、東京五輪を終えた今、もし丸山なら現在の日本の状況にどんな感想を持つだろうかとふと考えてみた。

東京五輪は差別と偏見を乗り越える多様性社会の実現を謳った。五輪は人権や平和、民主主義やナショナリズムを再考する機会でもあった。しかし与党政治家による「ナチスに学べ」発言があり、旧日本軍が犠牲を強いた朝鮮半島や中国、旧オランダ領インドネシアにおける元「慰安婦」の存在を否定する政治家・ジャーナリストらの特異な歴史認識は今も影響力を持っている。それに同調する出版物に群がる人々も少なくない。その現象を見ると、五輪関係者による女性や障害者への蔑視発言やSNS上でスポーツ選手を標的にする匿名中傷の連鎖だけでなく、そもそも人権や民主主義の受け止め方において、日本社会は戦前・戦中の「空気」と今なお通底しているのではないかと思えてならない。民主主義の根幹をなす理念が、建前としか受け止められていないのではないかとさえ感じる。

難民問題もそうだ。最近亡くなったスリランカ人女性への出入国在留管理局による対応を目にすると、人権は今の日本では真に重みを持つ価値として受け止められているとは思えない。

※　※　※

丸山には難民はもちろん、人権をタイトルにした談話はあるが論文はない。また民主主義を論ずる時も「制度化された民主主義」に対しては常に警戒的だった。「戦後民主主義」を評価していたにもかかわらず、それはなぜであろうか。

没後に刊行された『自己内対話』（みすず書房、1998年）の断片にこんな一節がある。「多数を以てしても圧服できない個人の尊厳という考え方―その根拠づけがキリスト教以外のどこに求められようか」。ここには人権感覚や民主主義精神を体得するには何よりも「個人の尊厳」への理解が不可欠であり、そのためにはキリスト教などの精神的・宗教的根拠が求められることが暗示されているのではないか。

丸山眞男はキリスト者ではなかった。偲ぶ会は無宗教で執り行われた。それだけに丸山の言葉から、人権や民主主義を既知の通念として語るのではなくその価値を内面で活かし支える精神的・思想的源泉を今一度省みてもいいのではないか。この言葉は丸山なりの痛切にして密かな「信仰告白」でもあったのではないかと私には思えてならない。

（元さっぽろ自由学校「遊」理事、元北星学園理事）

戦場カメラマン 渡部陽一氏の講演「世界からのメッセージ ～平和と命の大切さ」を聞いて

リュミエール池

講演の概要

2023年8月3日、江別市民会館において石狩管内教育講演会実行委員会主催で、戦場カメラマン渡部陽一氏の講演「世界からのメッセージ～平和と命の大切さ」が行われたので、その概要について報告する。

戦場カメラマンとなった経緯

大学の授業で聞いたチンパンジーと話すアフリカの狩猟民族に興味を持ち、20歳で彼らに会うため全く現地の知識もなしに、コンゴ民主共和国に行った。しかし当時はツチ族とフツ族の抗争で約100万人の犠牲者が出たというルワンダ内戦中だったため、ルワンダの少年兵に襲撃され、カメラを含めた私物全てを差し出すことで助かった。

帰国後周囲の人に、その被害と少年兵がいる実情を説明したが、理解してもらえなかったことから、その場の状況を伝えられる写真の必要性を痛感した。そして戦場に立たされ泣いている子供達の声を一人でも多く残し伝えるために、「戦場カメラマン」となることを決意したという。

テロリストと戦う少女

子ども達が自由に学校に通って学ぶ。この誰にも与えられている日常が、世界では決して当たり前ではない地域がたくさんある。パキスタンのイスラム武装勢力タリバンによる圧政が強まるなか、インターネットのブログを使って女性教育を声高に訴えた少女は、15歳の時、スクールバスの中で頭を銃で撃たれたが、奇跡的に命を取り留めた。彼女の名はマララ・ユスフザイさん。その後、国連で女性が教育を受ける権利などを訴え、その存在が世界中に広まり、2014年に史上最年少の17歳でノーベル平和賞を受賞した。

彼女は受賞講演でこう語った。「戦争は武器を使って止めるものではなく、一本のペンと一冊の教科書そして一人の先生がいれば世界を変えることができる」と。渡部陽一氏がこの地域に行くと、今でも子ども達から「日本では自由に勉強できるんですか？」「教科書は何冊あるんですか？」「給食はあるんですか？」と聞かれるという。渡部氏は笑顔を引き出す写真を撮りたい、と述べられた。

質疑応答

最も印象に残った国はどこか

今まで135か国へ行っているが、その中で最も印象に残っている国はイラクである。1991年の湾岸戦争や2003年に始まったイラク戦争の時、劣化ウラン弾によって失明したり、首に悪性腫瘍が生じた子ども達を多数見た。もし戦場で泣いている子ども達のことを伝えなかったら、彼らはこの世界にいなかったことになってしまう。また、ライフライン、交通、通信施設、病院の破壊も多かった。これはイラクだけでなく、スラブ人の戦争や、スーダン、ニジェールなどでも同様であった。

安全対策はどうしているか

現地案内人、通訳、ボディーガードと自分の4人でチームを組み、誰か一人でもこれ以上進むのは限界だと言った時には、そこで引き返し、無理をせず、危険の中の安全性を心掛けている。

あなたにとって幸福とは何か

戦場へ行くと質問されることはいつも同じで、「テロリストと戦う少女」で述べた3つだという。だから、この子達に自由に学ばせてやりたいと思う。それが少しでも叶ったと思えるときに幸福を感じる。自分はやりたいと思った道を進んできた。なので特に若い人達には、やりたいことを、その道に入った人達に続いてどんどんやっていってほしいと願っている。

感想

ドストエフスキーは、人間の行為の中で最も悪質なものの一つは幼児虐待だと考え、『カラマーゾフの兄弟』においてアリョーシャに対しイワンに「野獣のような人間の残虐なんて表現をすることがあるけど･･･野獣は決して人間みたいに残酷にはなれない」と述べさせて、幼児虐待の実例を列挙した(第5編の4.反逆)。また彼は、「貧乏は罪悪ではない･･･しかし貧乏もどん底となると罪悪ですよ」(『罪と罰』第1編の2:以上、原卓也訳)とも語っている。ドストエフスキー没後141年になるが、これらの状況は変わっていない。人間は中途半端に知恵をつけてしまったがゆえに、いつまでたっても戦争の悲惨な歴史から学んでいないのだと思えてならない。

また、ハンナ・アーレントは、ナチスの強制・絶滅収容所の犠牲者に対して「忘却の穴」という概念を明示した。すなわち、これら犠牲者がこの世に存在しなかったことにされてしまうことが最も残酷な仕打ちだというのである。渡部氏は、戦争の最大の犠牲者は子どもであると述べ、その実例を話された。その子達が存在しなかったことにされてはならない。そのことを写真を通じて記録することが私の責務であると述べられて、聴衆に感銘を与えたのである。

筆者も50年近くに亘って、公害防止管理者、APECエンジニア(アジア太平洋地域経済協力に関わる日本政府公認技術者)、環境再生医(上級)として世界15か国を訪れ、地下水を中心に、JICA業務を含む地下水資源開発、環境問題、防災などに取り組んできたが、渡部氏のお話を肝に銘じてほんの少しでも世界平和に寄与したいと思わずにはいられなかった。

渡部氏の写真は、講演会チラシから、左の写真は「テロリストと戦う女の子」から引用した。

本 Books

草木に魅了された人生は型破りで、愛に満ちていた

われらの牧野富太郎！

いとうせいこう監修　毎日新聞出版　2420円

牧野富太郎の生涯が描かれるNHKの連続ドラマ「らんまん」を楽しく観ています。

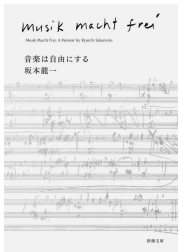
牧野は1862年4月、土佐の静かな山間、佐川村の裕福な商家に生まれ、造り酒屋の跡継ぎとして育てられました。しかし、子どもの頃から植物に心を寄せて、全てを書き止めました。この本にもいくつか掲載されているスケッチの精密さに驚きました。

大きな目次が目を引き、牧野の美しい植物画が我が家にある図鑑よりも、ずっと身近に感じることが出来ます。波瀾万丈な生涯や、植物へのあくなき探求心を知りました。そして何より、たくさんの人が牧野富太郎への想いを語っていて、亡くなっても愛されたことが伝わってきました。

本を開くと牧野の名言から始まります。「草木に愛を持つことによって人間愛を養うことができる」「植物を愛すれば世界中から争いがなくなるでしょう」の言葉は今の政治家に聞かせたいです。キリストの言葉とも重なりました。戦争ではなく一輪の花に心を寄せたいと想い続けた牧野氏の生き方に共感しました。

お金には縁がなく、妻の壽衛（すえ）は苦しい生活の中で夫を支え、子育て、借金取りをいなし、夫の友人たちをもてなし、後年は自ら店を経営するなど大活躍します。牧野には人を惹きつける力があったようです。

彼がかつて行っていた植物採集会をプランツ・パーティとして現代に再現してみたレポートが楽しい。いとうせいこうさんが、牧野博士に成り代わって故郷の佐川を歩き、バイカオウレンを探す場面を多くの写真で紹介しています。（樋口みな子）



いつも響いていた音楽への想いを語る

音楽は自由にする

坂本龍一著　新潮文庫1100円

2023年3月28日に病気で亡くなった坂本龍一さん。71歳でした。どんな人生を送ったのか知りたくて読んだのが本書です。

坂本さんが生まれてから高校生くらいまで、大学から大学院時代、YMO時代、「ラストエンペラー」からその後ニューヨークへ移った時代、そして最近と転換期ごとに当時を振り返っています。月刊誌『エンジン』のインタビューで語った著者の言葉をもとにした、音楽家の個人史です。

私にとって馴染みがあるのが『戦場のメリークリスマス』『ラストエンペラー』に代表される映画音楽です。『怪物』で使われた新曲が最後の曲でした。映画そのものより音楽が心に響きました。

2001年9月11日の筆者の体験が、人生を変えます。気が気でない状態がここでは綴られています。テロのあとは、恐怖の中で必死に情報を集める毎日だったこと。必死で思考した日々を振り返っているのが一番印象に残りました。「世界中のいろいろなところで、色々な人たちが、同じような輪を作って行動していた。その輪がつながって大きくなったのが、イラク戦争の開戦直前に世界中で行われた数千万人規模の反戦デモですね。あれだけ多くの人々が世界各地で、同じ思いを持ってストリートに出たのに、アメリカは結局イラクに侵攻してしまった。あのときのアメリカに対する深い失望が現在の世界の状況につながっている」と述べていて、反戦平和や脱原発運動や、東日本大震災の復興支援への長年の取り組みなど、音楽家の枠にとどまらなかったこととつながっているように思いました。

「アレクセイと泉」のドキュメンタリー映画の音楽を担当します。舞台はチェルノブイリの事故によって放射能汚染された、ベラルーシの小さな村です。私も観ました。筆者は、「核により第2のテロがあるんじゃないかと怯えていたので、すごく感情移入して作った。今聴いても恐怖に怯える自分の様子が目に浮かぶようです」と書き、「それでもそうやって音楽を書いているうちにほんの少し恐怖が和らいでいくのを感じた」とも書いています。それが音楽の力ではないかと。

私は死が怖いです。病気の家族がいるので、そのことにとらわれると眠れなくなります。そんな時、音楽を聴くと気持ちが安らぎます。坂本さんのご冥福を祈りながら坂本さんの音楽を聴きたい。
（樋口みな子）

自分の体をいつくしんで

くもをさがす

西加奈子著　河出書房新社　1,540円

カナダに移住して、乳がんになった西加奈子さん。闘病ではないあくまでも治療だと書く。その治療は医師や看護師だけではなく、たくさんの友人たち、家族とさまざまな人たちが関わっています。こんな支えがある人はそう多くはありません。カナダは移民の国です。助け合うのが日常だというのは、私も数年前にカナダを旅して感じたことでした。医療も教育も（高校まで）無料です。でもこの本を読むと、緊急性のある患者が最優先されるため、待ち時間がとても長いのが辛い。乳がんの場合、手術してその日のうちに退院というのも驚きでした。著者は両方の乳房切除で、時間もかかり、入院しましたが2日だけ。日本では考えられないです。でも大変な治療を深刻にならずに、カラッと描写していて、さすがの筆力。カナダの人々の言葉も関西弁で書かれていて、そのやり取りが面白い。私も病気になったら、自分を観察できる強さを持ちたい。

著者はカナダの看護師も日本とは別の意味で最高だと書く。「彼女たちは、私を決して甘やかさない。あくまでも対等だった」と書き、「キックボクシングや柔術だけでなく好きなことやりや」と励ましてくれたと言う。

「本物の私たちの身体を、誰かのジャッジに委ねるべきではない」とも書きます。私ならそんな風に言い切れるか自信がありません。

抗がん治療に苦しんでいる時「こんなに弱っている自分の体を、内側から見つめることが出来るのは、私だけなのだ」と書き、両乳房を切除したあとには「私は自分のこの体を、心から誇りに思った。人生で一番自分の体を好きになった瞬間かもしれなかった」と記します。

著者は特別強い人ではありません。死が怖いと正直に書きます。手術の時には日本に住む母に「祈ってや」と頼むのです。私も同じです。素の自分をさらけだすのは勇気がいります。そんな率直さに共感しました。困っているときに、助けてくれる友人たちも素敵です。彼女たちも、異国で苦労して生きてきたからこその優しさだと思いました。カナダには子どもを預かってくれるディケアがあることも知りました。

がん治療の中で感じた辛さ、怖さ、悲しさ、嬉しさ、そのすべての感情をそのまま書きとめた記録。それでいて読後感は温かく生きる力を受け取りました。
（樋口みな子）

スタジオジブリの生き証人が全作品を語る

スタジオジブリ物語

鈴木敏夫責任編集　集英社新書　1760円

1984年に公開された「風の谷のナウシカ」から今年7月に公開された宮崎駿監督 最新作「君たちはどう生きるか」までの制作秘話が、丁寧に明かされています。「君たちはどう生きるか」は、前宣伝は一切なくパンフレットも当初ありませんでした。それでもジブリファンは上映会場に駆け付けたのです。私もそんな一人でした。

ディズニーのアニメしか知らなかったので、「風の谷のナウシカ」を見た時、メーヴェに乗って空を飛ぶナウシカのスクリーンいっぱいの躍動感に心を奪われた日を思い出します。アニメが子どもだけでなく、大人が楽しめるようになったのはジブリのおかげだと思います。

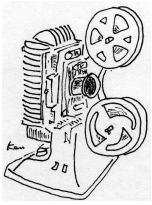
試行錯誤の上に生まれる企画から、スケジュールと闘う制作現場、時代を捉えた宣伝戦略、独自の経営法まで、その過程のすべてを、最新作までの27作品それぞれを余すことなく紹介しています。

次から次へとヒットを飛ばし順風満帆に見えたジブリという船も、内情は全く違っていました。高畑勲さん（故人）、宮崎さん、鈴木敏夫さんこの3人にまつわるエピソードはどれも抜群に面白く、冒険心と情熱と冷徹なまでのこだわりに、満ち満ちています。ジブリは究極、作る側が本気だから見ている側も虜になるんだと思います。監督が苦しみながら企画を練り直す経緯と、張り詰めた制作現場の緊迫感が伝わってきます。

朝日新聞　折々のことばに宮崎さんが語った言葉があります。『「ずっといっしょにやってこれた最大の理由がわかった」（何なんですか）「お互いに尊敬し合ってないこと」』と宮崎さんは言います。鈴木プロデューサーは「遠慮なく言い合うことで仕事は成立する。だから信頼はするが尊敬はしないのが自分たちの流儀」だと。宮崎監督の「子どもたちに、この世界は生きるに値するとアニメで言い続けなくてはならない」の信念が伝わってきます。

鈴木さんの記憶と証言に驚くことばかりでした。何しろ宮崎さんは「終わったことはどうでもいい」人であり、「大事なことは、鈴木さんが覚えておいて！」が口癖だという。鈴木さんは生き証人です。

本の帯に記された宣伝コピーで、あなたはどの作品か分かりますか？たったひとことに凝縮した言葉で想像させます。（樋口みな子）



善人が虐殺に走る怖さを描く

福田村事件

森達也監督　脚本　佐伯俊道
井上淳一　荒井晴彦

今年の9月1日は関東大震災から100年。震災時の朝鮮人虐殺に関わる史実をベースにした群像劇。舞台は千葉県東葛飾郡福田村です。

森達也監督は数多くのドキュメンタリーで日本社会を問いました。この映画はなんとしても観たいと思いました。

朝鮮で虐殺事件を目撃した澤田智一（井浦新）は教師でしたが、妻の静子（田中麗奈）と故郷の千葉県福田村に帰郷します。香川から来た沼部新助（永山瑛太）率いる薬の行商団も福田村を通りかかります。15人の一行は香川の被差別部落の人たちでした。

福田村でも自警団が結成されます。讃岐弁を話す行商団を朝鮮人と疑い、取り囲むのです。制止する澤田夫妻や村長や渡し船の舟頭も暴走にのみ込まれます。村人たちも朝鮮人だと決めつけ、彼らに襲いかかるのです。あまりにリアルで私は直視出来なかったです。良心的な立場と思えた人々も止めることが出来ませんでした。群衆心理の残忍さに私もその場にいるようで胸が苦しくなりました。行商団の幼児や妊婦を含む9人が惨殺されました。

新助が差別について核心を突いた言葉が忘れられません。

女性記者が「新聞は何のためにあるのですか」と政府のいうままに朝鮮人を排撃する記事を書く上司に抗議する場面があり、今のメディアへの抗議でもあると思いました。加害の歴史に真正面から取り組んだ作品です。（樋口みな子）

子どもたちとケヴィン校長の「対話」の授業

ぼくたちの哲学教室

ナーサ・ニ・キアナン、デクラン・マッグラ監督

北アイルランド、ベルファストにある男子小学校。ここは「哲学」が主要科目です。少年たちに「どんな意見も価値がある」とケヴィン校長は言います。授業に集中出来ない子や、喧嘩を繰り返す子らを否定しません。「やられたら、やりかえす？」と少年たちと対話を繰り返します。

229号（2022.6.10号）で映画「ベルファスト」を紹介しましたが、プロテスタントとカトリックによる宗派闘争の傷跡が残るアードイン地区では未だに衝突が起きており、ヨーロッパで最も青少年の自殺率が高いとされています。

「目を瞑って、何も考えないでいられることができるか？」といったテーマを提示した上で、生徒たちに考えることを働きかけます。問題を起こしてしまった生徒とは、1対1でホワイトボードを用いつつ対話をします。「何が起きたのか」「その上で今どうすべきなのか」とボードにペンで書き足しながら、心に寄り添って生徒が抱えている悩みや葛藤を整理していくのです。

かつて暴力で問題解決を図ってきた後悔と挫折から新たな憎しみの連鎖を生み出さないために彼が導き出した一つの答えが「哲学」の授業というのが素晴らしいです。

ケヴィン校長のお茶目なキャラクターも本作の魅力のひとつです。エルヴィス・プレスリーの大ファンの彼の携帯電話からは、度々エルヴィスの着うたが流れます。授業中も家庭訪問中もお構いなしにです。

ケヴィン校長をはじめ、教員たち全員で子どもの些細な不安や怒りに気付き、見守っています。中でも副校長のジャン・マリー・リールは、興奮し、動揺を隠しきれない生徒と、ジャン副校長が個室で1対1になって話す場面。彼は「友だちもいないし学校にも行きたくない」と投げやりに言い、悲しみに満ちた表情をしていました。ジャン副校長は「イヤなことリストをつくろう」と生徒に提案します。そして彼の言葉を遮ることなく、ひとつひとつに相槌を入れながら聴く中で、実は糖尿病の治療をしていること、父親とあまり会えていないことなど、とても私的な悩みを生徒は打ち明けていきます。

「対話」を通して得る他者への思いやりや、自分自身に向き合って生きること。子どもから大人まで多くの人々に届いてほしいです。

ロシアのウクライナへの軍事侵攻から1年半。いつ戦争が終わるのか未だに先が見えません。日本が軍事費に投ずる予算の大きさに、戦争前夜のような不安を覚えます。平和を維持することは容易ではないと実感する日々。ベルファストの取り組みは平和を築くとても大切な取り組みだと思います。

日本の小中学校でも上映会を企画出来ないだろうかと思いました。（7月初旬に観て前号で紹介できませんでした）（樋口みな子）

誰が少女を死に追い詰めたのか

あしたの少女　**チョン・ジュリ監督**

2017年に韓国で起こった実在の事件を基に、ごく普通の女子高生が過酷な労働環境に置かれ、心身共に憔悴し自死へと追い込まれていく姿を描いた社会派ドラマです。

ソヒ（キム・シウン）がダンスの練習をしているシーンから映画は始まります。ソヒは、学校で担任教師から大手通信会社の下請けのコールセンターを紹介され、実習生として働き始める。韓国では、現役の高校生が企業に実習に行くのは普通のことなのでしょうか。それが就職にも結びつくらしい。だから、教師はどんどん生徒を送り出し、簡単に辞めるなと言い含めます。だが、そこは過酷な職場。顧客からの解約の申し出をあの手この手で引き伸ばし、解約を諦めさせるばかりか、他の契約も結ばせることを使命とする部署だったのです。それにはノルマがあり、職場で厳しい競争をさせられます。

前半は成果至上主義に苦しむソヒが、チーム長の自殺で新しいチーム長から「事件を外に出さない」という覚書きにサインを拒み、懲戒処分を受けます。それにサインすれば特別ボーナスを支給するというが、その嘘を見抜いていました。会社は契約書で保証されているはずの成果給も支払うこともしていなかったのです。絶望したソヒは真冬の貯水池で遺体となって発見される。

後半は刑事ユジン（（ペ・ドゥナ）が登場します。見た顔だなぁと思ったら「ベイビーブローカー」に出演していました。彼女が捜査をすることでデタラメな会社や学校、役所などの実態が、「これでもか！」と観客の眼前に再び突きつけられるのです。見ている私たちは、ユジン目線でソヒの過酷な現実を追体験するのです。

ソヒが実習をしていたコールセンターは、ほぼ全員が社員ではなく実習生だという。会社は利益のために学生を食い物にしていたのです。同じく学校も就労率アップのため、生徒を送り込み、実習先の労働環境をチェックすることもしていないのですから、無責任です。

ユジンが根気よく、コールセンターの不当な労働や、教育庁が就職率によって高校への支援金を出すようになっていて、学校としては就職率を上げることが目的化していたことも明らかにするのです。

チーム長が自殺した時に労働環境を見直していたら、ソヒの自殺を防げたのではないか。監督の強い思いが伝わって来ました。

ユジンのような刑事がいたら心強い。見つかったソヒのスマホには、生き生きと踊るソヒの姿が残っていました。ユジンと接点があったのです。どこかで出会っていたらと思わずにはいられませんでした。ソヒのような少女を二度と死なせてはならないと怒りのメッセージが込められていました。

（樋口みな子）

懸命に生きる姿は尊い

春に散る

瀬々敬久監督

沢木耕太郎の原作を、「護られなかった者たちへ」「とんび」などで知られる瀬々敬久監督が映画化しました。

心臓に持病を抱え、人生の最終コーナーをかつての仲間とゆっくりと歩くつもりだった広岡仁一（佐藤浩市）は、ボクシングの教えを乞う翔吾（横浜流星）と出会ったことで、遠い昔に捨てた夢のために、全力で走り始めます。

仁一は元ボクサーでアメリカでチャンピオンめざすも夢は果たせませんでした。しかし事業で成功し40年ぶりに帰国します。「人生は今しかない」とチャンピオンに夢を託す翔吾に、仁一は真剣に一から指導します。

肉体と魂を燃やし尽くすボクシングシーンが圧巻。手に汗握る迫力でした。俳優としても活躍する松浦慎一郎が、ボクシング指導と監修を担当。とても演技とは思えなかったです。横浜は映画の撮影後にプロテストに合格し、C級ライセンスを取得したと知り納得しました。

脇を固める元ボクサー仲間や、父亡き後、ジムを引き継いだ女性オーナーらとの交流も温かい。

劇中、現役時代の仁一に触れ「ロスの日系人はみんな、あんたに励まされた」というセリフがありました。ふたりの　真剣さに胸が熱くなりました。最後の一瞬まで生き抜くと覚悟を決めた仁一がカッコいいです。黒澤明監督の「生きる」の名場面を思い出しました。

（樋口みな子）

命を輝かせて踊る

裸足になって

ムニア・メドゥール監督

内戦から約20年後の北アフリカのアルジェリアが舞台です。働きながら一流のバレエダンサーをめざすフーリア（リナ・クードリ）はトラブルに巻き込まれて足を骨折。そのショックで声まで失います。フーリアを救ったのはろう者の支援施設で出会った女性たちでした。

理不尽なテロの暴力、重い病、孤児の身の上など、聞いているだけで胸が張り裂けそうになるような苦難を乗り越えてきた彼女たちは、フーリアのダンスに魅せられ、自分たちにも教えてほしいと頼みます。ダンスを教えることを通して、フーリアの魂は再生し始めます。海や山など雄大な自然を前に踊る姿は、神々しい美しさです。悲しみからたくましく成長していく姿をアルジェリアの新星リナが余すことなく見事に表現しています。生きる喜びに満ち溢れたフーリアに勇気をもらいました。（樋口みな子）

購読料と寄付をありがとうございます
（敬称略）7.7～8.25

高橋儁　甲野恵美　岩井善昭　高橋一　田中雄二　　中川充　貞兼綾子　阿部古鏡　矢間秀次郎

購読料とカンパ合計27,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。堀和恵（お菓子）澤耕司（梨）も美味しくいただきました。印刷代と郵送費が値上げして通信の発行が厳しくなりました。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 年間2.000円（郵送読者）をお願いいます。web読者のカンパも歓迎します。

秋の北海道　崔善愛ピアノトークコンサートが開かれます　七尾寿子

コロナ禍で、長く休会中だった週刊金曜日札幌読者会が、再開することになり、合わせて『金曜日』発行30周年記念に『金曜日』編集委員もされているピアニストの崔善愛（チェソンエ）さんのトークコンサート（写真）が開催されることになった。しかも、札幌だけでなく、小樽、室蘭、釧路でも各地の読者会主催で開催される。

崔さんと出会ったのは、植村隆さんのバッシング事件、裁判の時だった。崔さんは、東京から何度も札幌の裁判にも足を運んでくださり、ある裁判報告会に、ピアノとお話の小さなコンサートをお願いした。会場の北光教会のチャペルの十字架の下で演奏されたショパンもお話も聴衆の心に沁みた。

崔さんは、翌日、樋口みな子さんの「銀河通信200号記念」パーティーにも参加されて演奏のプレゼントをしてくださった。

東京の植村裁判支援コンサートでは、プログラムの最後にもう一人のゲスト、松元ヒロさんのパントマイムとピアノの即興のステージも忘れられない。ヒロさんの風船が崔さんのピアノに誘われ、ふくらんで空に飛んでいくようだった。

敗訴だった札幌高裁判決の報告会で、お願いしていたピアノ演奏は、ステージの袖で聴いて、そのタッチに引き込まれた。どんな状況でも、そこに置かれたピアノと対話して音楽を創り上げる。覚悟の定まった人だ。

そして、週刊金曜日に連載されている「歓喜へのフーガ」で、余市の農民音楽家、牧野時夫さんを取材でお訪ねしたこともあった。インタビューの最後に牧野さんのバイオリンと合奏。農園を渡る風も一緒に奏でてリンゴの木の葉を揺らした。

コンサートのタイトルはシューマンがショパンの音楽をこう評したという「ショパン　花束に隠された大砲」。在日二世の崔さんは、指紋押捺拒否をしていたために、日本に帰国できないかも知れないという不安を抱えながら、アメリカに留学した。ある日、出会ったショパンの書簡集で、祖国ポーランド独立の戦火の中から、その才能を惜しんでフランスに送り出されたショパンの孤独と苦悩、祖国への思いを知って、曲の深さに思い至ったという。

音楽を愛して日々精進し、社会に対しても正義の声をあげ、文章も書き、人に寄り添って生きる崔さんのお話とピアノをぜひ、お聴きください。

〈札幌〉10月7日（土）17:00
六花亭きたこぶしホール（北4西6）
〈小樽〉10月8日（日）14:00
潮陵記念館（小樽市潮見台2）
〈室蘭〉10月9日（月・祝）14:00
室ガス文化センターリハーサル室（室蘭市幸町6）
〈釧路〉10月10日（火）18:00
釧路エルムmusicサロン（釧路市新橋大通4）
開場は、いずれも30分前。前売り2000円。問合せ080-1898-7037（七尾）